

自然好きの スキーヤーの心配

福地 郁子

(当協会・常務理事)



スカンジナビヤ地方の雪原の交通手段であったスキーが、アルプスに入り急峻な、山肌を滑るための技術、用具がくふうされ、現在のアルペンの要素のゲレンデスキーとなった。日本にはオーストリア駐在武官として来日したレルヒ少佐が、豪雪の高田でスキーの指導をしたのが始まりである(一九一〇年)。その後、一般の人々にも山岳スキーとして、林間の自然を楽しみながら自由に滑り、温泉にひたりという時代を経て、現在のゲレンデスキーとなってきた。

きびしい北国の冬の野外スポーツと

して、広い大きな雪原に出ることは、心身共に、大変有意義な事と思われる。社会構造も急激に変動し、人々の生活も著しく変化した。スポーツは、個人的、社会的、経済的にも重要な活動の一部であると認識されるようになった。そんな背景をもってスキーヤーが急激に増大して来た。そしてスキー施設も整備され多く出来たが、マナー、ルールの方は追いつかず、技術を無視したゴンドラ、リフトの利用などの結果、事故やケガとなって表われている。

スキーヤーの増加もここ二三年がピークではなからうか。規模の大きさ、広さ、施設の充実でスキー先進国のヨーロッパでのスキー場は閑散としているというのではないか。あまりにも、用具、服装にお金がかかりすぎるといふ事でスキー離れが進んでいるらしい。

地域振興、内需拡大を背景にリゾート法が出来、まだ良い自然環境の残されている北海道に一層の熱い視線が、企業から送られている。炭鉱閉山、国鉄民営化のあり、農漁業、酪農、製鉄、造船の不振と四面楚歌の北海道である。その状況下に、地方自治体と大手企業との間で観光開発計画が、ひっきりなしに出ているこのごろだ。新聞などによると計画が五十ヶ所位、小規模のを含めると百ヶ所位もあるらしい。

多くはスキー場を含めたものが多く急峻な山を切り開き斜面を作る。けずられた山肌には緑化という事で芝などがはられてはいるが(スキー場作り総額の十%)新設スキー場の数が多くなれば問題も多くなるのではなからうか。

現在、既存のスキー場は北海道に百二十位ある。雪の多い市町村にはほとんどあるといつていいだろう。利用されるのは、週末に混雑するだけで、平日は都市のスキー場がスキー学習とスキーツアー客の利用で混みあい一般スキーヤーはごく少ないと思われる。情報化が進んでいる今日、コンピュータ等で各スキー場の利用客を把握してあきのあるスキー場の情報をどんどん流して、スキー場の混雑を解消する方法をとることが望ましいのではないか。そのため既存のスキー場は整備拡張して充実を計り、スキーヤーのニーズに答えて良いのではないか。これから多くのスキー場計画が出される事はまちがいない事実である。元手である、私達の自然が、あつという間に虫歯のようになってしまいう元には戻らない状態にならないことを祈りたい。私達スキーヤーも意識を変え、最新のゴンドラで毎秒、五mのものに乗らなくても今迄の二m位の早さで満足し、リフトの上からあたりの景色を眺める、周りの木々の観察等をするゆとりが、是非ほしいものである。(札幌市在住)